

今起こっている異常気象の解説とこれから起こる異常気象の予測

Asserted by Birkeland II 2014/01/23

小氷河期突入期である今現在、3.11以降の日本列島は首都直下型地震や各地の直下型地震、東海東南海南海連動型巨大地震、富士山巨大噴火、伊豆諸島巨大噴火、桜島巨大噴火、白頭山巨大噴火などの山体崩壊するような巨大噴火には未だ襲われていません。

これらが100年間くらいかけて順次襲ってくる事は避けられないのはその通りなのです。

ところで、今現在でも頻発しているのは、熱波、干ばつ、竜巻、豪雨、巨大台風、寒波、豪雪、などの異常気象なのです。

小氷河期突入期の異常気象について、以下見解を述べます。

端的に申し上げれば、今現在の地球気象現象とは前世紀からの海洋温暖化と赤道域地表海面の温暖化、対する南北両極域上空の寒冷化が綱引きしている状態であると考えられるのです。

その原因とは、前世紀中ごろからの銀河宇宙線の電子線成分の増加によるオーロラ電流の増大と、今世紀に入ってからの銀河宇宙線の粒子線成分の増加による大気熱圏の25%に及ぶ減少であると考えられるのです。

また、この銀河宇宙線の影響の増大とは、太陽系が銀河磁場に衝突を始めたからであると考えられるのです。

オーロラ電流の増大は海洋電流や地殻電流を増大させて、ジュール熱を生じ、南北両極域の海洋や海氷、氷河や氷床、大地(永久凍土)を温めたと考えられます。また海洋底に降り積もる有機物を電気分解し大量のメタンやCO2の放出を起こしたと考えられるのです。

大気熱圏の25%に及ぶ減少は、今世紀になって顕著となり、その結果、赤道域では太陽輻射が増大し、海洋を温め一部の大地(サヘルやオーストラリア)を乾燥化させたと考えられるのです。

同様に、大気熱圏の25%に及ぶ減少は、南北両極域では宇宙空間への放射冷却(漆黒の宇宙空間へ熱が放散される事)を増大させ、南北両極域の対流圏界面付近(対流圏と成層圏の境目)の大気を極度に冷却させたと考えられます。

その結果、成層圏温度がオゾンの沸点(マイナス111.9℃)以下まで冷却されたためにオゾンホールが発生したとも考えられるのです。(オゾンホール発生の原因は人為起源フロンではないようなのです。)

ここ数年の豪雨災害のメカニズムとは、前世紀からのオーロラ電流による海洋温暖化があった上で、最近の熱圏減少による赤道域海面への太陽輻射の増大が水蒸気蒸発量を極度に増大させた事がまずあって、その上で同じく熱圏減少による極域上空の放射冷却が進んだ事によって赤道域と極域との温度勾配が増大し、偏西風の蛇行が生じ複合して局地的な豪雨災害が起こっていると考えられるのです。

今般北米で発生した強烈寒波とは、北極極域上空の冷却がますます進んでいる事を示唆しており、また偏西風の蛇行によって寒気が中緯度まで南下した事も示唆しているのです。

やれ地球は温暖化だ、やれ地球は寒冷化だ、と言う言い方自体、物事を単純化しすぎており、本質を見誤っていると考えられるのです。

そして、ここ数年の冬季の寒波の様子から、急激に両極域上空の寒冷化が優勢になってきたとも考えられるのです。

そのために南北両極域では豪雪が降り、海氷や陸氷が急激に増大したのです。

昨年の北極海夏季の海氷は前年比60%の増大に転じ、年末には夏季の南極で南極観測砕氷船が海氷に閉じ込められているのです。

みなさんだいたいお解かりになったでしょうか？

もう一度確認しますと、前世紀より海洋はオーロラ電流増大によって温暖化し、比熱の大きな海洋は非常に温められた状態であると考えられるのです。

対して、大気最外層の熱圏が25%も薄くなった関係で、地球は衣を一枚取られた状態となり、赤道域の地表海面はがんがん暖められ、北極や南極の上空はぐんぐん冷やされていると考えられるのです。

つい最近までは、海洋の温暖化と赤道域表層の温暖化が勝っていたのですが、ここへきて北極南極上空の寒冷化のほうが急激に優越したために異常気象が激甚化していると考えられるのです。

さて、これから近未来の気象現象はどのように推移するのかについて、以下私の予測を申し述べます。

今現在の状況とは海洋と赤道域表層の温暖化、そして、南北両極域上空の寒冷化によって気象現象が激烈になっている、という事でご理解いただけたと思います。

多くの気象学者はここで思考を停止してしまうのですが、私はもう少し先を洞察したいと思います。

海洋温暖化にしる、永久凍土の融解にしる、赤道域海表陸表の温暖化にしる、南北両極域上空の寒冷化にしる、その原因は何かという事を今一度明確化しとかなければなりません。

前項に申し上げましたように、その原因とは銀河宇宙線のまずは電子線の増大があり、その後銀河宇宙線の粒子線の増大が起こっていると考えられるのです。

上記の原因とは、電子宇宙線、粒子宇宙線を順にまとった銀河磁場に太陽系が突入を開始したからであると考えられるのです。

だとするならば、これから近未来について銀河宇宙線、特に粒子宇宙線が益々増大するだろうと見当が付くのです。

海洋の温暖化と赤道域への太陽輻射の増大によって水蒸気蒸発量が増し、大気湿度が増大している事は昨今の激しい豪雨災害から間違いありません。

そうだとすると、地球大気の上層部では大気が過飽和状態(これ以上水蒸気を含めない状態のそれ以上)である見当が付くのです。

高校物理の授業で霧箱の実験をやった諸君は、過飽和状態の大気に宇宙線が降り注ぐとき微細な雲滴を生ずる事を知っております。この現象が大気中で起こる事をスベンスマルク効果と言います。

いよいよこれから、過飽和状態の地球大気上層目掛けて大量の銀河宇宙線(粒子宇宙線)が降下して大規模にスベンスマルク効果を起こすと考えられるのです。

その時、地球大気の上層は巨大火山が噴火した時以上のエアロゾル(微細雲滴)に覆われてしまい、大気の白濁(はくたく)化(白くにごる事)が起こるのです。

地球大気上層が白濁(はくたく)化するとき、太陽輻射は遮断され、地表は一挙に冷却してしまうのです。

その様子は徐々に起こるかもしれませんが、銀河宇宙線の増大が急激であれば急激に、ひょっとするとデアファートウモローのように突発的に起こるのでしょう。

通常の火山噴火であれば、噴火は精々数年で収まるものなのですが、上記メカニズムの場合、一旦温暖化してしまった海洋の比熱が大きいため、地球大気がだいぶ冷却した後も海洋からの水蒸気蒸発は続き、そのため、粒子宇宙線の降下が続く限り地球大気上層の白濁(はくたく)化は収まらず、大気の寒冷化は100年以上続くでしょう。